

最近一躍有名になった世界の地域の筆頭は、何といってもバルト三国だろう。ソ連邦の西のはずれ、バルト海に面して北からエストニア、ラトビア、リトアニアと並ぶ三国は、ベレストロイカの先鋒として、世界の注目をあびてきた。

バルト三民族の言語は、ロシア文字ではなくラテン文字を用いて表記される。三つの言語のうち、エストニア語だけが、

インド・ヨーロッパ語族ではなく、ウラル語族に属する。エストニア語を母語とする約一〇〇万人のうち九割がエストニアに住む。フィンランドの公用語の

フィンランド語は、エストニア語ともっとも近い関係にあり、相互理解も困難ではない。エストニア語は、一九一八年から一九四〇年まで存在した独立国「エストニア共和国」の公用語だったが、バルト三国のソ連邦併合後は「エストニア・ソビエト社会主義共和国」の「地域民族語」に格下げされ、以来エストニア人はロシア語習得を強制されてきた。

一九八九年一月、改革派が多数を占めたエストニア共和国の国会

で念願の言語法が可決され、エストニア語は公用語としての地位を取り戻すことになった。官庁などには数年の準備期間がもうけられているが、半世紀におよぶモスクワによる支配で、全人口の三分の一、都市部では住民の二人に一人が非エストニア人となってしまうエストニアの再エストニア語



え・村井宗二

化は決して容易ではない。

一九八八年の夏ごろからエストニアで急速に発展した政治改革には、「歌う革命」という愛称がある。これは、流血事件までおこったコーカサスや中央アジアの諸共和国とはちがって、改革派の大集会がコンサート形式で「平和的に」はじまったことに由来する。「歌う革命」ということばの仕掛人、人気風刺漫画家ヘインツ・ヴァルクは、人民戦線の活動家として日本のテレビにも登場した。

58

## エストニア語 (eesti keel)

「歌う革命」の担い手

〈laulvas revolutsioonis〉 osalejad

松村 一登

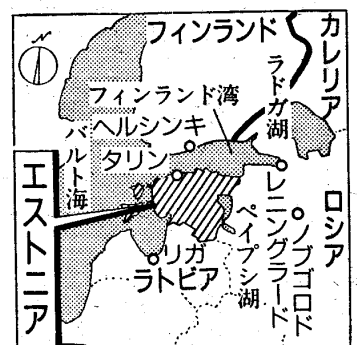
# 世界のことば

人・歴史・風土

「歌う革命」の政治コンサートのなかでもっとも有名になったのは、一九八八年の九月中旬にタリンで開かれた三〇万人を集めたといわれる集会だろう。エストニア人は全部で一〇〇万人ほどだから、エストニア人のほぼ三人に一人が会場に集まり、歌の間には生まれた人民戦線の活動家たちの政治演説を聞いたことになる。この深夜までつづいたコンサート集会の様子は、その年のうちに『エストニアの歌 '88』というタイトルの三時間のビデオに編集され、まもなく外国のテレビでもその一部が放送されて、話題となった。

コンサート集いに三〇万人が集まったこともさることながら、そもそも人口一五〇万(うち三分の一はロシア人などの非エストニア人)、面積四万五千平方キロ(九州と沖縄県を合わせたよりやや広い)の国にこれだけの人数を収容できるコンサート会場があることは驚異に値する。「歌の広場」と呼ばれるこの会場は、タリンの旧市街から二、三キロ東に行ったところにある。

エストニアの大きなコンサート会場の伝統は、一八五〇年代の末に各地で開かれた「歌謡祭」に始ま



る。全国規模の歌謡祭は、一八六九年にタルトで開かれた第一回エストニア全国歌謡祭が最初のものである。このときには、エストニア各地から参加した四六の合唱団(七八九人)と五つのブラスバンド(五六人)がステージに登ったという。全国歌謡祭の伝統は、今日まで一世紀以上にわたって続いており、最近では五年ごとにタリンの歌の広場で開催される。次回の歌謡祭は一九九〇年七月である。

一九八九年の夏には、同じ「歌の広場」で、外国からのアーティストも参加したロックコンサートが開かれた。この模様を紹介したテレビのニュース番組を見ていて気がついたのは、一年前にあった政治的にはりつめた空気がなくなっていたことだった。短期間のあいだの政治的環境の変化は著しい。

(まっむら かずと・言語学)

▽次回はノルウェー語